

令和元年度 第3回  
岡山県広域特別支援連携協議会  
岡山県発達障害者支援地域協議会

日時:令和2年2月4日(火)

13:30~15:00

場所:ピュアリティまきび 白鳥

議事

(1)発達障害のある人のトータルライフ支援プロジェクトの実施状況について

○事務局から配付資料に基づき説明

協議

委員

・特別な支援を必要とする幼児への支援状況調査について、全国、あるいは他県の状況はどのようなになっているのか。

委員

・ご指摘の調査については、県独自の調査であり、他県が同じような調査をしているかを含めて、把握していない。アンケート調査の範囲内であり、参考数値と考えている。  
・調査の数値をみると、一時的な支援の場が市町村に出来つつあり、二次的な支援を発達障害者支援センターが行う形になってきているのではないかと理解している。  
・県のセンターとしての役割の位置付けをどのようにしていくかという部分は課題であると感じている。

委員

・発達障害者支援センターの実績の数値を見ると、岡山県は他県と比較すると低く思う。  
・各市町村の発達障害者支援コーディネーターに、一次支援を任せているからという説明があったが、それが理由なのか。

委員

・25市町村に発達障害者支援コーディネーターを配置しているが、全員が全てのライフステージの支援が出来るのかといえば、そうではない。発達障害者支援コーディネーターとしての経験年数や元の職種も様々である。  
・そのため、発達障害者支援コーディネーターからの相談に応じていることも多いが、それは実績として資料に数値を示していない。  
・同様に、各市町村の支援体制整備を支援するため、関係各課と様々な会議を行い、仕組みづくりを一緒に考えることも行っているが、それも実績として資料に数値を示していない。  
・これらの理由により、実績の数値が低くなっていると考えられる。

#### 委員

- ・発達障害者支援コーディネーターへの相談対応や各市町村の支援体制整備支援等の実績も数値として示す方が良いのではないかと。

#### 事務局

- ・機会を捉えて報告できればと思う。

#### 委員

- ・センターを旭川荘に委託した時点で、当初からどちらかというと二次支援に特化していると思う。
- ・二次支援に力をかけ過ぎたことで、一次支援するだけの力がないのではないかと感じる。
- ・発達障害を診ることが出来る医師がセンターに配置されているのか。

#### 委員

- ・県の委託をする業務の中に医師の配置というのは設けていないため、現在、医師の配置はない。
- ・心理士は配置している。
- ・その辺も含めて、今後どうしていくのが課題と考えている。

#### 委員

- ・発達障害を診ることができる医師の絶対数が足りていない。
- ・現在、配置が出来ないところへ委託する事が、そもそも間違いではないのか。
- ・二次支援しかできない状況に陥ってしまうということも含め、委託そのものについて考えるような委員会を作っても良いのではないかと。

#### 委員

- ・非常に重要な課題をいただいた。今後の中期・長期的な課題だと思う。
- ・まずは診断となるが、全体の支援をどうしていくかは、とても大きな課題だと思っている。

#### 委員

- ・美作市では、市の発達支援センターには心理士等を配置し、相談対応している。
- ・県の発達障害者支援センターには、毎月ケースカンファレンスとして相談に当たる者の指導、オブザーバー的な立場で来てもらい、ケースワークの仕方や、コンサルテーションについて教えてもらっている。
- ・支援体制整備支援として、平成26年に美作市にセンターができる前から、発達障害者支援センター支援に入ってもらい、就学前後の切れ目のない支援のための引継ぎや、小中学校の引継ぎを進めている。
- ・美作市の相談にも何件か、直接支援で入ってもらっており、助かっている。

## 委員

- ・親の会としては、県と市の両支援センターがあり助かっている。
- ・特に県の支援センターは限られた予算・スタッフの中で出来ることを、一生懸命しているという印象を持っている。
- ・人材育成は時間が掛かるため、各市町村でコーディネーターが十分機能しているかどうかは分からないが、大切に育てていけば良いと思う。
- ・今回行った調査の回答の中で良い考えがあれば、ぜひ紹介して欲しい。
- ・お金が掛かってくることではあるが、出来ることをやっていければと考えている。

## 委員長

- ・事務局の説明としては相談件数等が中心に報告されたが、トータルライフ支援の全体の状況とこのものはどうなっているのか。

## 委員

- ・トータルライフ支援には、体制整備、人材の育成、乳児期から成人期までを具体的にどのように支援していくか、の三本柱がある。
- ・三本目の柱は、切れ目なく情報を次の支援者につないでいながら、一人の方の生まれた時から最終的に出来るだけ自立するまでを支援者が輪をつないでいながら支援をしていく、その仕組みづくりのことである。現在、情報連携の仕組みということで、市町村で統一様式を作りながら支援をしてもらっている。
- ・令和3年度からプロジェクトを新しく作り替えていくので、ぜひ意見をいただきたい。

## 議事

- (2) 発達障害のある子どもの就学について
- (3) 小中学校における通級指導教室充実事業について
  - 事務局から配付資料に基づき説明

## 協議

### 委員長

- ・課題として、「特別支援学級を退級すると手厚い支援を受けられなくなるという不安がある」と記載されているが、そのような不安に対して、通級に入るメリットを記載した方が良いのではないかな。
- ・特別支援学級を退級すると手厚い支援を受けられなくなる、という保護者の不安は当然のことかと思うので、メリットの部分をもっとアピールする方がよいのではないかな。
- ・中小連携型では、小学校の先生が中学校へ行き、兼務するが、これに対する負担の問題が出ていないのか。また、その場合のサポートについてはどのようになっているのか。

### 事務局

- ・通級の良さ、メリットについて、これからもっとアピールをしていく必要がある。特に中学校では、通級指導教室が設置されているところが少ないため、通級の良さを積極的に伝えていくことが

必要だと考えている。併せて、指導内容の充実も大切にしたい。

- ・小中連携型における負担についてだが、研究実践市において、特別支援教育に対する専門性の高い者を担当者(兼務者)としている。その研究のため、人を加配しているため、学校等には負担が掛かっていないと考えている。
- ・小学校と中学校の両方に勤務することで、どちらの良い文化も持って帰ることができるなど、兼務の良さもあると考えている。

## 委員

- ・就学先の決定に際して、保護者は自分の子どもに、最も良い条件、環境で学ばせたいと思っている。そのためにも、保護者に対する情報の周知を徹底してほしい。
- ・保護者からの相談を受ける場の設置も必要性が高い。配付された資料にも、「どこに相談したらいいですか」という感じで書いているので、これを実践してほしい。できれば、専門の窓口を作り、そこで相談ができるという形がよいと思う。
- ・小中学校は学校数が多く、その学校ごとに特色があるので、自分の子どもに合っている、学ばせたいと思った学校で教育相談を受け、就学先を決定するようなことが、教育側は大変だろうが、できたらありがたい。
- ・通学学区を弾力的に考えられることができたと思う。
- ・正しい就学に関する情報を知りたいという保護者の声がある。
- ・最も大事なことは、保護者と先生のコミュニケーションである。定期的に良い話も含めて話し合いの場を設けていくことが必要。
- ・学校現場で先生が本人に対して、障害理解ができていないと思われる発言をしていることがある。県として、先生方を指導しているとは思いますが、効果があまり感じられない。何十年も前の話ならいざ知らず、現在でもその様な事が続いており、非常に残念だ。

## 事務局

- ・教育委員会が就学相談会を開いている市町村がある。このような取組を推進していくため、市町村に働き掛けたり、リソースが必要であれば県教委と市町村教委が連携したりしながら、理解啓発に取り組んでいきたいと考えている。
- ・市町村教委も相談を受け付けてはいるが、特別支援教育コーディネーターや教頭等、学校のスタッフの中で就学に関する相談を受けられるような状態を作っていくことも大切になってくる。
- ・発達障害者支援センター、各地域の発達障害支援コーディネーターなど、様々な支援者の方に、就学の流れなどの教育のシステムを知ってもらうことも、必要であると考えている。
- ・大切なポイントは、保護者としっかり合意形成をしていくことだ。なぜ、そのようなルールがあるのか、こういうルールだからこうなるという事を説明し、納得した上で、就学先を決定していくことがとても大事だと思っている。市町村教育委員会にも、今回の内容等を伝えていきながら、引き続き、就学先の決定に関する相談を丁寧に進めていくようにしたいと思っている。
- ・個別の支援だけでは教育は成り立たない。どこかの段階で、通常の学級で、沢山の障害のない子どもたちと学ぶ、そこにはそれを率いている先生がいて、その先生との関わり、あるいは子どもたち同士の間関わりが非常に重要になってくる。
- ・特別支援教育の担当が、しっかり保護者とコミュニケーションを取っていくことも重要だが、まず

は学級担任や隣のクラスの先生など、色々な先生が特別支援教育に関する知識を持って話を  
していくことも、私たちが大切にしていかなければいけない。特定の先生だけではなく、教員全て  
が保護者の方と良い関係を築けるように、色々な機会を捉えて伝えていければと思っている。  
・学校現場における先生の心ない発言について、県教委として、このようなことがないように指導  
しているが、まだまだ指導が行き届いていない部分もある。もしも、そういった話を聞いたら学校  
の管理職、あるいは市町村教育委員会に、伝えていただければありがたい。言葉のやり取りの  
中で、言った者にとっては気にならないことでも、しんどさをもっている子どもたちにはとてもしん  
どい、ということがある。悪意なくやっているという場合は、その状況を変えていかななくてはいけ  
ないので、「こういうことがあってしんどかった」ということを伝えながら、関わり方を振り返って  
いくという事も大切だと思う。

#### 委員

・この会は、知事部局と教育委員会と一緒に開催する会か。

#### 委員

・それぞれの法に基づき、協議会を開催している。協議会のメンバーが同じであることが多いた  
め、合議をし、共通認識を行っている。

#### 委員

・一緒に行えば良いと思うが、お互いのコミュニケーションを密に取らないといけない。  
・一次支援も二次支援も、教育委員会で考えたら一次支援になってくる。先ほどの要望も、ほとん  
ど一次支援なので、知事部局の方が委託している、センターはどのような対応をしているのか、  
これが問題になってくる。そこを別々に説明してしまうと、本当の連携はとれないと思う。

#### 委員長

・岡山市発達障害者支援センターの話も聞きたいと思うが、いかがか。

#### 委員

・庁内連携をいかに密にするかという事が大切である。  
・一次支援と一体的な二次支援というのをやっていくと、分かることが多く、職員が少ない中で、  
発達障害者支援センターをアピールするほど、相談件数が増えてきている。ただ、人員増が厳  
しい中、アピールすることで、仕事が回らなくなるのではと、その責め際で、職員が頑張っ  
ている状況だ。そういった意味では、一次支援をさらに発達障害者支援センターがやらないとい  
けないと思っていない。  
・岡山市内には色々な社会資源が多くある。まずは地域の保健センター、あるいは保育園の保  
育士等、最初に親子に出会う機関が、いかにスキルを持って、その子どもたちの発達を見極め  
て、必要な支援につなぐということが大切である。  
・それぞれの立場で、必要なスキルを持ってつないでいき、初めて良い支援が出来るのではない  
か。今は一次支援をやりながら、地域の一次支援を担ってくれているところのスキルアップを、ど  
うしたら図れるかということを考えている。

- ・ただ、それには専門家の御意見、支援をいただかないといけないので、精神科あるいは児童精神科の先生との連携は欠かせないため、色々な意味で連携が大切である。
- ・家族支援に関しては親の会と色々な情報をもろうアンテナを高くしてやっていきたい。
- ・市としては、トータルで見るとということは、一次支援をしっかり根付かせる中で、どういった支援が必要になってくるのかを、9年間の義務教育、そしてその先、就労して自立となると、様々な社会資源がつながっていかないといけないので、そこを誰がどのようにしてつないでいくかが重要になってくると考えている。
- ・それぞれの部署が発達障害に対してどのような支援をしないといけないのかを、主体的に考え、考えたことがどれだけのつながりを持ってやれているかを把握して、弱いところは強くつながりを持ってやらなければいけないところが課題である。
- ・大きい課題ではあるが、まず一番は支援を求めている親子の生の声を聞いて、そこからどういった支援が必要かということ、支援機関と一緒に考えていくというスタンスが大事と思いながらやっている。

#### 委員長

- ・今のご意見について何かあるか。

#### 委員

- ・トータルライフ支援の中でどういった支援が必要なのかというのは、それぞれの担当で考え、それを寄せ集めて、生活を終えてみたら良かったねというようになれば良いと思う。

### 3 その他

### 4 閉会